

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：16201
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24730421
 研究課題名(和文) フランスの「エスニック化」と旧植民地出身女性移住者の社会編入 日常性の抵抗戦術

研究課題名(英文) Ethnicization of French Society and migrant womens' social integration

研究代表者

園部 裕子 (SONOBE, YUKO)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：20452667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：女性移住者の社会的・経済的地位は、「アフリカ人」・「黒人」認識のズレ、政府・社会による「女性移住者=労働者」という位置づけ、社会編入支援の枠組みにより変容しつつある。1980年代以降「身近なサービス」推進のため、職業訓練と社会的支援をセットにした失業者の社会編入が進んでいる。女性移住者団体はこうした事業体とも連携する。つまり、移民統合・失業者支援という両者の目的が交差する対象に位置づけられる。公共空間においてはフランス社会側による「アフリカ人」、女性移住者らによる「黒人」という二つの表象が地位を措定している。彼女たちが自らを「黒人」と呼ぶのは「白人」集団との相互作用の場においてである。

研究成果の概要(英文)：This research examines status of migrant women from former French colonial Sub-Saharan African countries in receiving country, France. Recently migrant women's status has changed because of three main reasons. Difference of recognition as "black" by themselves and as "African" by the receiving society; The French government now treats them as workers but not a member of family as it was in the former period; Changing framework of integration. Since 1980s, French social policy, which promotes proximate service (les services de proximitÉ), seeks to integrate unemployment persons by employment formations and social accompaniments. Migrant women's associations collaborate with organizations such as SIAE. In the public space, the society see them as "African" but women see themselves as "black," which has some connotations like discriminated, exploited or marginalized. This self-identification as "black" is particularly apparent in face-to-face interactions with "white" French people.

研究分野：社会学

キーワード：移民 ジェンダー フランス アフリカ 連帯 社会統合

1. 研究開始当初の背景

フランスでは、2006年以降、右派大統領が「被ってきた移民から選択する移民へ」をスローガンに移民政策の大幅な転換を行い、移民抑制的な法律を施行した。その実態は労働者として必要となる人材の選抜で、高度成長期の移民労働者動員時代への回帰に他ならない。

他方で、これまで人権として認められてきた家族統合の条件が強化されるなど、移民にとっては権利の後退ともいえる条項も含まれている。1990年代後半以降、そして2011年以降、アフリカ大陸における経済危機や政治変動に伴い、旧植民地出身「アフリカ系」移民の存在は、量的にも質的にも重要度を増している。

こうした政治的規制に対し、2000年代のフランスでは、ポスト・コロニアル研究と旧植民地出身移民の社会的地位を再検討する研究が活発化している。これには奴隷制を人道に反する罪と認めた2001年の「トービラ法」、2005年に全国のZUSで起こった若者による大規模な「都市暴動」も、おもな契機にしていると考えられる。その結果、2000年代になって旧植民地フランス語圏出身者の位置づけが急速に「問題」化されつつある。

他方で、移民の「エスニック化」過程を問い直す研究もある。旧植民地フランス語圏出身者のうち、特に北アフリカのマグレブ諸国出身者(Maghrébins)はひとつのエスニック・グループと見なされ、サハラ砂漠以南のブラック・アフリカ出身者は、「アフリカ人」(Africains)と呼ばれて集団化される。ところがこの「アフリカ人」には、旧植民地出身移民と海外領出身フランス国籍者の双方が含まれている。両者はそもそも「フランス人」としての意識の上で大きく異なる自覚を抱いており、特に後者は前者と同一視されることに大きな抵抗を抱いている(Ndiaye 2008)。このような当事者の自覚によらない、「外見」による移民のグループ化と、それぞれに表象が与えられる傾向を、Amselleは「フランスのエスニック化」と呼ぶ(Amselle 2011)。他方で移民やマイノリティ集団の文化的特性、特に「アフリカ人」の男性優位性が女性や子どもの自立性に悪影響を及ぼしているという分析もある(Lagrange 2010)。

現地調査によると、女性たちは自らを

「黒人」と呼び、日常生活の多方面で「白人」の論理と自分たちの論理との対比、乖離を指摘していた(業績2)。さらにNdiayeも指摘するように、「アフリカ人」の中でも知識人層は「黒人問題」を掲げ、市民団体連合CRANを形成して公的空間で意見表明を行うとともに、統計による「黒人差別」の証明を試みている。このように社会が与える呼び名、集団化と、当事者とされる人々の認識の間には、大きな乖離がある。

2. 研究の目的

本研究では、フランスにおける旧植民地出身「アフリカ系」女性移住者の行為者としての社会編入過程を「サバルタンの主体」による日常実践とし、出身社会および受入社会における主体性の布置構造を分析する。その際、旧植民地=フランス語圏西アフリカ出身移民が、その地理的・民族的・宗教的多様性にもかかわらず「アフリカ人(Africains)」として集団化、「エスニック化」される社会的過程をまず解明する。次に、その外部からの「エスニック化」に対して、女性たちが日常生活において抵抗し自らの場を社会にひらく行為を「日常性における戦術」としての「創発的共同性構築」と位置づけ、その実践過程を明らかにする。

3. 研究の方法

De Certeau(以下、セルトー)による日常実践における戦略と戦術の論理、そしてそれを敷衍する松田(2009)による「日常性のセルフ」論を、現代フランスにおける女性移住者の市民団体活動にどう適用できるか、文献調査と現地調査から検討する。

セルトーは、権力の規律に対して、それに従いながら対抗する被支配者による実践のことを、戦術と呼んでいる。戦術は、固有の場を管理して発せられるものではなく、他者の場や力を利用する「非・場所的」なものである。この戦術の結果はディスクール(言説)というかたちをとらず、機会を「とらえる」行為であり、そしてそのとらえ方であると定義されている。この「戦術」に対して、固有の場を前提とし、意志と権力の主体が自ら独立を保って明白な敵に対する関係を管理できるような合理性は、戦

略 と位置づけられている。

受入社会の規範を共有せず、社会的に排除された移民は、その社会において支配的な論理を駆使し、独自の場や空間を占めることで自らの地位を確立することはできない。セルトーが「戦略」と呼ぶこうした権力主体の論理や空間に対して、弱者の「戦術」は「非一場所 (non-lieu)」的で、時間に依存する。弱者は、自分にとっての「よその」土地において「日常実践 (pratiques quotidiennes)」を展開する中で、たえず警戒し、利になる機会をすばやく捉える「戦術」に頼るしかない。「戦術」は自分に固有のものではない権力の論理や力を弱者が日常実践により利用し、横領する「策略ruse」、「仕方、てだてart」である。

女性移住者による社会・文化的仲介と市民団体活動は、固有の場を維持することなく、機会を見つけて集まり、公営住宅の申請においては、区議や区役所関係者への直訴やはたらきかけなど、およそ有効とされる機会をとらえ、「利用」することをねらう「戦術」であるといえる。

松田 (2009) は、この「弱者」による「戦術」の行使を、日常世界における創造性の発露と個人性の生成という場面を設定して深化させている。そこでは「黒人」であり「女性」である人々による連帯が、きわめて暫定的なものにすぎず、他の「異なったカテゴリーに属する人々」との間にも創造的な連帯をつくりだす「創発的共同性構築」の可能性を秘めていることが指摘されている。

以上の文献調査の結果をふまえて、戦術としての女性移住者による連帯活動の事例を収集し分析するため、現地調査を行う。とくに女性移住者による市民団体活動の日常実践について参与観察を行い、必要に応じて関係者への聞き取りを行う。

4. 研究成果

女性移住者の社会的・経済的地位は、「アフリカ人」、「黒人」の認識のズレ、政府・社会による「女性移住者 = 労働者」という認識形成、ZUSの社会編入支援の枠組みにより、大きく変容しつつある。他方でフランスでは1980年代以降、介護や家事といった「新しい需要」の充足と失業対策を両立させるため、「身近な

サービス」が推進されてきたが (Eme et Laville 1994 ; Laville 2010)、「都市政策」においては先述の「社会編入支援機構 (SIAE)」による住民の雇用と「社会的支援 (l'accompagnement social)」による社会編入の手助けが推進されるようになっている。応募者がこれまで参与観察を続けてきた女性移住者の市民団体は、このSIAEのうち、もっとも社会的困難度が高く、労働経験がない住民を対象とする市民団体と連携している。移民統合・失業者の社会編入支援というそれぞれの目的が交差する対象として、女性移住者が位置づけられていることが分かった。

また、公共空間における「アフリカ人」と「黒人」の表象の、女性移住者の地位への影響について、「アフリカ人」というカテゴリーが社会でどのような場面、状況において使用され、どのような含意を持つのかを分析し、女性移住者が自らを「黒人」と呼ぶのは他に措定される (例えば「白人」) 集団とのどのような相互作用の場においてなのかを事例から分析した。

以上のような研究結果をまとめ、以下の雑誌論文、学会発表、図書にあるように公開した。

またこれらの発表の準備と並行して、これまで調査を続けてきた移住女性団体に加え、その団体も含む複数団体によるネットワークの活動に対象を広げて現地調査を行った。その結果、調査先の女性移住者団体は、西アフリカを中心とする複数の出身国において直接、あるいは現地の女性団体と連携して、開発支援活動を行うためにネットワークを形成していることが分かった。

調査期間中に事例を収集するため、セネガルにおいて、フランスの女性移住者団体と現地の女性活動家による市民団体が連携して行うマラリア防止キャンペーンについて、マリにおける、農村女性によるシアバター生産のための協同組合活動、についてそれぞれ参与観察を行った。

この複数団体ネットワークによる、出身国女性団体との連携の実態については、とくに女性の健康や生活環境といった社会面、収入の確保のための技術支援などの経済面、それらの活動を通じた啓発と発言力の強化といった政治面に分けられ

る。このような女性移住者という 外部との連携により、送出国女性の地位はそれぞれの側面において向上しつつある。その実態を詳細に調査することは、今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

園部裕子、2013「フランスの社会的排除・失業対策と移住女性—パリ市における社会編入支援組織 SIAE と移住女性アソシエーションの連携を事例に」『香川大学経済論叢』第85巻第4号、213-240頁(査読なし)

〔学会発表〕(計1件)

園部裕子、2012「西アフリカ出身女性移住者による地位交渉のジェンダー化—2000年代フランスにおけるFGMを理由とする難民申請の事例から」第85回日本社会学会大会、札幌学院大学(北海道)、2012年11月3日。

〔図書〕(計1件)

園部裕子、2014『フランスの西アフリカ出身移住女性の日常実践—社会・文化的仲介による「自立」と「連帯」の位相』明石書店、448頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

園部 裕子 (SONOBE YUKO)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：20452667